神戸 YWCA／東日本大震災被災者支援プログラム

いっしょにいぐべ通信③　2011 年 10 月

神戸 YWCA（担当：西本）神戸市中央区二宮町 1-12-10
TEL 078-231-6201

希望の梨、苦闘の梨　～福島の声を聴いてください～

福島での被爆のまっただ中で、汚染されていない農産物をつくろうと努力する大内有子さんの想いに私たちは共感し、大内さんの作った梨を紹介することにしました。

一日に 10～15 マイクロシーベルトもの被爆の中で、大内果樹園では様々な除染の努力がなされてきました。その中で、今回放射能不検出（1ベクレル未満）で生産されたこの梨は、次世代のこどもたちに希望を残そうとする大内さんの苦闘の中で生み出された果実です。

原発事故の賠償責任は東電や国にありますが、私たちには、原発を止め得なかった責任があります。この「梨」は、私たちへの問題提起です。そして残念ながら「被曝の時代」を生きることとなった一人ひとりへの問いかけです。

私たちは、福島の地で希望をつなごうと闘う人とも、県外に出てこどもを守る人とも共に歩みます。

- 被曝に恐れおののくお母さんたちに寄り添い、県外避難ができるように力を尽くします。
- 福島県内で、除染やこどもたちのいのちを守る活動に取り組む方々に協力します。
- 日本の高すぎる「食物の放射能暫定基準値」の早急な改訂を要求します。
- 日本に生活する人々に、放射能被曝に関する正確な情報が遅滞なく知らされることを要求します。

そして、いのちを育み次世代に引き継ぐ使命をもつ女性の視点から、YWCA ならではの活動を続けていきます。

2011 年 10 月 10 日
神戸 YWCA 福島を考えるチーム一同

★日本YWCAは1970年に「『核』否定の思想に立つ」を強調点に掲げ、核兵器だけでなく、原子力の平和利用にも「否」を唱えてきました。

大内果樹園
梨のお申し込みなど
TEL&FAX
024-556-0363

大内有子さんのブログ（9月25日）より抜粋

http://blogs.yahoo.co.jp/fukushima_apple/6055351.html

私達は、この半年、「福島で農業を続けられるのか・・・続けて良いのか？」という問題を抱えながら、農地に向かい合ってきました。観念的にではなく、汚染の只中で、汗を流しながら格闘してきました。連日の畑仕事は、原発作業員なみの積算被曝量となるため、若い農業後継者には、避難して他の土地での就農を勧めてきました。

ただ、誰かが残って農地再生の活路を求めていかないと、福島の農地(農村)はどんどん疲弊していきます。と同時に、人心もまた荒れ野のように荒廃していくだろうと感じます。私たちが「目にする」環境が、私たちの心に与える延享は、とてもとても大きいものです。

大きな歴史的スパンで考えると、耕作できる土地を守り、再生していくことは、未来の世代への貴重なプレゼントになるのではないか（予想される食料危機etc.）との思いもあります。

農業者に良心があるなら、汚染された農産物の出荷を止めろとのご意見も頂きました。食べてくださいとは言いません。ただ、私たちの様な生き方もあるという事を認めて、許して頂きたいのです。

今、この福島に生かされていることに感謝しています。

３月15日、16日の断末魔の危機から救われた奇跡を何度も想い返し、希望を失わなければ道は開けるという確信が、いつも心に湧き起こります。

同じように、福島には、多くの大人やこどもが留まっています。避難できない様々な問題を抱えて…またはこの地に留まる決心をして…。遠い避難場所からではなく、福島のこの場所で、留まる人々の痛みや苦しみに寄り添う活動もまた、私たちの生き方であると思い始めています。

■神戸 YMCA&神戸 YWCA 共同企画
余島わいわいキャンプ
ご協力ありがとうございました

福島のこどもたちの避難プログラムの一環として、８月 10 日から 15 日まで、神戸 YMCA＆神戸 YWCA 共催「余島わいわいキャンプ」を実施しました。神戸 YMCA の皆さんがこどもたちとお母様方を余島キャンプにご招待くださり、私たち YWCA が福島からの送迎と前後泊プログラムを担当しました。

楽しい歓迎会、瀬戸内海の無人島でのはじめてのキャンプ、どんなにぶつかってもびくともしないお兄さんリーダー、皆で入った銭湯、初めての電車、動物園で食べたアイスクリーム、お母さんのために買ったお土産…。あっという間の５泊６日でした。学童保育所「どんぐりクラブ」さんからは宿泊場を、YWCA 近くの Café HOME さんからはお弁当を、会員のご友人からはおいしいチーズケーキをそれぞれ無料提供いただき、応援の輪が YWCA の外に広げられた事も感謝なことでした。

歓迎会の後で会員のお一人が教えてくれました。「お母さんのお一人が“心配せずに食べられるのがうれしい”と言っておられた」。お母様方の苦闘は観念的なものではない。毎日の生活の一こま一こまの中での闘いなんだと知り、自分の想像力の鈍さを恥じました。

プログラムは終わりましたが、福島の方々の闘いは続いています。これで終わりにしてしまうことなく、せっかく出会ったこどもたち、お母さんたちとこれからもつながり合い、励まし合い、助けあっていきたいです。（西本）

いっしょにいぐべ！　福島